『マネジメント』1970年7月（日本能率協会）

「いざ鎌倉」と「公害」と

—— 新教科書噺 ——

改訂される社会科教科書

妙な二題噺(ばなし)のような題をかかげたが、実は今度新しく改訂されて７月の教科書展示会に出る小学校社会科教科書の話をしたいのである。歴史の教育の中で神話を取扱うことが必要であるとか、愛国心の教育の必要性とかが教育課程審議会から答申されたのを、もう忘れてしまった人もあるかも知れないが、いよいよそれが姿をあらわしてきた。

筆者の小学校時代は歴史の教科書は神代の話からはじまったが、「とよあしはらのみずほのくにはわが子孫のきみたるべき地なり」などという話をどう受けとっていたのか、あまりはっきりした記憶がない。ただ、それを史実として受けとってはいなかったことは確かであるけれども、肝心の科学的な究明の方法が与えられていなかったから、全く暗闇の中をさまようていた。

高校時代に和辻哲郎氏の「日本古代文化」にふれて、神話と事実、人間の思想の意味について目がひらかれた思いがしたと同時に、急に国に対する不信の念を抱くようになった記憶がある。また、上級学校へ進まなかった人々と話合ったとき、神話と事実との区別についてあまりにもくらい精神をもっていることに失望を感じた。合理的な考え方への道が閉ざされているという憤りをもった。現在の子供は考古学的な事実にもふれているから、私たちとはちがうのであろうが——。

愛国心は必要かもしれないが

ところで、年輩の人なら誰も知っている「いざ鎌倉」の話も今度の教科書にはとりあげられている。これは実話であるが、ある児童たちにその話をしたら、「つまり、それはやくざのいうスケットのことだね」と結論したというのである。なるほど武士集団のけんかに日頃の恩を感じて馳せ参じるのだから、今からみれば、その通りである。

私は子供の感覚のあり方に感服させられた。しかし同時にそれを鼓吹して、それを愛国心につなげようなどと大人が考えても、子供の方は愛国心とはやくざのスケット精神かと考えるかも知れない。それを子供が積極的によしとするか、悪しとするか。これまた新たな問題となるかもしれない。

もう１つ今度の社会科教科書に姿をあらわしたのは公害の問題である。どの教科書もあまり明確な態度をもたないように見える。あるいは当たりさわりのないよぅに取扱うように指導があったのかも知れないが、子供の方はズバリ割り切っている。これも実際の話だが、水俣病の話をしたら、子供たちは、「会社がごまかそうとするのは当り前でしょう」「国は大きな会社と関係があるから、どうしても一般の人の味方にはならないでしょう」とシャーシャーといってのけた。民衆の感覚というものかもしれないが、考えさせられることである。国が一生懸命公害をなくそうと努力をしているなどというだけでは教育にならないばかりか、逆効果かもしれない。

この頃の新聞を見ても、やれみやげものの中味は９割がウソだとか、効かない大衆保健薬が売られていて、それを学者が支持しているとかという人間の信頼の根本がゆらいでいることが多すぎる。社会を維持形成する精神のよわさが、そういう現象を生んでいるのであろうが、社会科の教育はそういう社会を破壊するものに断固戦いをいどむべきではないか。それを忘れて体裁のよいことをいってもそれは教育になるまい。世のため、人のため憤りを発して働く人間こそが育てられるべき時ではないのか。愛国心は今こそ強調されるべきだが、やくざのスケット精神とまちがえられぬようにしないと、ますますエコノミック・アニマル教育になるのである。

（ 矢口　新 ）